



TITLE:

稲垣子戩の譯した坤輿全圖說に就て

AUTHOR(S):

鮎澤, 信太郎

CITATION:

鮎澤, 信太郎. 稲垣子戩の譯した坤輿全圖說に就て. 地球 1934, 21(1): 52-56

ISSUE DATE:

1934-01-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184244>

RIGHT:

と共にまた温泉の湧出關係に於ける型をも代表することになる。従つて泉源が水成岩・火成岩の相違に依り異なるのは勿論であるが、同一岩種にても裂隙の大小密粗・斷層の影響・温泉作用に依る變質・地下水面の高低等の湧湯關係を支配する要素の異なるに従つて特異な曲線を表す筈である。將來此の點に注目して資料を累積して行けば温泉地質學の進展上貴重な文獻を得られることと思ふ。(完)

(昭和8年10月記)

參考文獻

- 一、鈴木敏博士 福井圖幅地質説明書。
- 一、小川博士 加賀山中温泉視察概要 地學雜誌 昭37 16卷 186號。
- 一、陸地測量部地形圖 金澤(廿萬分ノ一) 大聖寺(五萬分ノ一) 參照。

稻垣子戩の譯した坤輿全圖說に就て

鮎澤 信太郎

一

近頃東京文理科大學圖書館の所藏する坤輿全圖說と云ふ木版刷の一本をみた。この本には普通の書物の様に著者の姓名も無いし、又此の書

は元來漢文のものを邦譯したものであるが、其の原本も如何なるものか明かにされてゐない。其等は或は後節に述る如く、此書に附隨する地圖の中に明記されてゐるのかも知れないが、筆

者は以下此書の内容と序文及跋文に據つて其の譯者並にその原本等に就いて考へてみたい。

二

この坤輿全圖説の著者は享和元年辛酉仲冬に橘春暉の撰した此本の序文に「伊勢稻垣生。嘗從余學天文。覃思研精。其學大進。餘力及地理。頃獲地球全圖。蓋爲明人精通西洋學者所作也。生珍翫之。至就其譯文。重譯以國字。別作圖説一卷」云々とあるに依つて橘春暉の門下で伊勢の人稻垣某であることが分る。そしてこの稻垣は稻垣子戢と云ふ者であることが同じく一學山人と稱する人の書いた此書の跋に出てゐる。

次に此書の原本は、上記の序文によれば明人で西洋の學に精通した者が作つた地球全圖であつたと云ふのである。此序文より外には原本の何物かを物語る何等の記事も見當らないのであるが、此本の内容をみると、例へば「歐邏巴洲に三十餘乃國皆前王乃政を用ひ又一種乃教あり凡官に三品あり其上は教化を興す事を専らとし

其次は俗事を判理し其下は兵戎の事を治む土地五穀五金百果を産す酒は葡萄酒を以て造る諸乃細工精巧を極め天文乃事性理乃學通曉せざるなし其風俗あつくすなほにして五倫を重し君臣康富にして四時外國と相通し客商天下に偏し」とか「利未亞乃地虎豹獅子をはじめ禽獸乃類多し又一種乃猫あり其汗極く香し國人石を以て汗のこひて香を収む歐邏巴の人多く此香を用ゆと」などゝあり、其他いづれも書中記する所は明末萬曆壬寅に利瑪竇が北京で著した坤輿萬國全圖の註記を日本文に改めたものであることが分る。

それにも拘らず稻垣氏の坤輿全圖説中にその原本を著した者は西洋の學に精しい明人とのみあつて全々利瑪竇の名を出してゐないのは恐らく次の様な事情からではなからうか。

即ち新井白石が正徳年間にシドッチを訊問した時に利瑪竇のことを訊いたが、彼は利氏に就いて全く知る所がなかつた。そこで白石は結局

「寶本生於廣東旁近海島間。北學於中國者。實非西方之人。」と云ふ闢邪論の説を信じて利瑪竇は西洋人ではなく明人であるとした。従つて利氏の著した世界地圖に就いても白石は常に「明人所刻」と云つてゐる。^(註)

此の考へは其後享和二年に山村昌永が、その増譯采覽異言に於て「昌永按ニ利瑪竇西洋ニ於テノ本名ハ『マツタイスリツウス』ト云ナリ——中略——源公遯馬及ビ和蘭ノ人ニ問フニタゞ利瑪竇トノミ云フ故ニ西人識ラザルナリ」云々と云つて白石の誤りを正すまで世に行はれたものゝやうである。此の山村昌永の増譯采覽異言はこゝにみる坤輿全圖説が稻垣氏によつて出版された享和元年の翌年に出来たものであるから、稻垣氏が之を見てゐないことは云ふまでもない。従つて誤つた白石の考へを稻垣氏が踏襲し、この地圖は明人が作つたものと云ひ、敢て利瑪竇の名を出さなかつたのであらう。

三

此書は上記の橘春暉の序文でも分るが、更に凡例の一に「原圖大にして常に見るに煩勞なり因て余これを小圖とす但し其各國乃界或は島峽地勢の如き聊か億見を加へず原本に少しも違事なし」とあり、次に又「各所土產等乃文章原圖は圖中國名乃傍に記す此圖は挾小にして悉く記す事能はず故に圖説を附して其國名乃次に記す猶方所疑しきは圖に因て合せ見るべし」とあることに依つて見るに此圖説の外に今こゝで筆者の見ることの出来ない世界地圖一本が附隨してゐたものであることが明かである。

此地圖は即ち利瑪竇の世界圖の註記の大部分を省いて縮刷されたものである。然し圖中の説明文や地名を全部省いて別冊にしたものではなく、凡例の一に「土產等乃文章圖中其所々に記すも乃は圖中猶餘乃所あるが故なり」とある如く、餘猶のある所へはやはり原本通り註記が加へられたものであつた。

日本に關する註記や墨瓦蠟泥加洲に關する註

記は圖說中に見當らないが、之等は右の事情から地圖の方へついてゐるのに相遠ない。

尙凡例の「原圖彩色を施さず今見易からんために彩をなす強て六大州を分つ乃みにもあらず」とあつて、此圖は利氏の原圖と異つて彩色されてゐたことが分る。

四

右の如く利瑪竇の坤輿萬國全圖が稻垣子戩に依つて縮刷され、註記は別に書冊にされて世に問はれたのは橋南谿の序によれば、享和元年仲冬であつた。所が今筆者の據る坤輿全圖說一卷（東京文理科大学圖書館所藏）は其跋文によると稻垣氏の出した原本ではなく、其翌年即ち享和二年壬戌冬に稻垣氏の友人大森敬夫と云ふ者が更に地圖を精密にし、圖說の方へは此跋を撰した一學山人と稱する者の所藏してゐた「方俗莫類禽獸草木之圖」を加へて出版したものである。奥書に「彫工洞津正木堂傳右衛門」とあることから察して此書は伊勢の津で開版されたもの

稻垣子戩の譯した坤輿全圖說に就て

であらう。

從つて、此書の中には「赤道直下ノ諸方熱國人、野作人、夜國人、奥蝦夷人、蝦夷地方所産驢、駝馬、椰樹」等々あやしげなる繪が多く入つてゐるが、之は享和元年出版のものは欠く所であらうし、又最初の原本たる利氏世界圖にも關係はないのである。

五

近く徐宗德氏の著す「明末清初灌輸西學之偉人」に利氏世界圖は支那でも嘗て（一六九九年？）「貴州總督が圖中の華文を摘出註解して別に書冊とし、圖を縮刷してその中に入れ、各省に配布した。此本は遠く日本・澳門迄も傳はつたが、惜しむらくは未だ其の原本を得られない。」と云つてゐるが、丁度それと同じやうなことが我國でも稻垣氏に依つて行はれたわけである。利氏の世界圖が江戸時代我國の地理學界に多くの影響を及したことは既に諸先學の幾度か論證された所であるが、未だ此利氏圖翻刻書に就い

ては注意されてゐないやうである。乃ち敢て秃筆を此書の紹介に揮ふ所以である。

(註一) 新井白石著 采覽異言書異言後參照。

(註二) 中日文化協會編輯部翻譯本「明代支那に於ける西洋學術紹介の偉勳者」(滿蒙パンフレット 第三號)一〇頁參照。

三陸海嘯罹災地方に於ける聚落の移轉

岩手縣氣仙郡末崎村に就いて

米 倉 二 郎

一
昭和八年三月三日午前二時三十一分金華山沖の海底を震央として勃發した激震は、續いて大津浪の襲來となり岩手・青森・宮城・北海道の一道三縣に亘つて多大の災害を惹起した事は世人の記憶に尙新なる處であらう。陸奥・陸中・陸前、所謂三陸の太平洋岸地方は、複雑に開析された北上山地の山谷が沈降して、峯は海中に突出して岬角となり谷は溺れて深灣を生じ、出入

錯雜せるリヤス式海岸である。一般に津波は暴風の襲來、海底の大地震、海底火山の爆發、火山爆發又は山崩れ等によつて起つた海水の大波動が激しい勢で傳播し來り沖合に於ては左程感じないのが狹長なる灣入せる海岸に及ぶや急に高さを増し陸地に侵入して人畜に危害を及すに至るものである。三陸の海岸は海底火山及地震の活動盛んなる太平洋に面し、しかも漏斗狀の狹長なる灣入に富むリヤス式海岸である爲地震